

少女の中の少女を目指して ——後期ヴィクトリア朝の少女雑誌における コンペティションの意義

牟田有紀子

はじめに

Kirsten Drotnerが“the invention of the girls’ periodical is clearly the most important innovation of the late-Victorian era” (123) と言うように、定期刊行物が大いに流行したヴィクトリア朝の文化研究において、近年少女雑誌の価値が見直されている。少女雑誌は、10代前半から20代半ばの若い女性の間で何が流行していたかだけでなく、新しい読者層の出現、若年層への消費文化の浸透、Henry Jenkinsらが言うところの“participatory culture” (1) の拡大を明らかにするための重要な資料である。後期ヴィクトリア朝の少女にとって、雑誌は新しい形のエンターテインメントだった。雑誌には小説、エッセイ、詩、楽譜、料理のレシピ、ファッションやマナーの指南など、少女が手に取りたくなるような読み物で溢れていた。特に、1880年以降は少女雑誌の商業的価値の認識が広まり、出版社はより少女の興味を引くコンテンツを研究して読者の獲得を試みた。その一つが、本稿で取り扱う賞金付きコンペティションである。

Kristine MoruziとNatalie Coulterが“By producing content for girls and about girls, the magazine helped to draw girls together into a specific community of readers and by extension legitimated girlhood as a site of subjectivity” (91) と述べるように、当時の少女雑誌は読者を雑誌作りに巻き込んでパブリックな空間に連れ出し、共同体を形成することの重要性を理解していた。19世紀にはすでに多くの新聞や大人向けの雑誌が読者投稿欄を設置し、読者による議論の場を提供していた。少女雑誌もまた、読者の悩み相談や質問を受け付ける投稿欄を設置し、それぞれの出版理念を守りながらも、読者が望む最新情報を提供することで購買を促した。一方で、*Monthly Packet of Evening Readings for Younger Members of the English Church* (1851-99; 以下MP)¹ のように、著名な少女小説作家Charlotte M. Yongeが編集長を務め、*The Daisy Chain, or, Aspirations* (1856) のように19世紀に親しまれた作品を輩出した伝統ある雑誌であっても、流行を取り入れることへの躊躇も一因となっ

て、世紀末には販売部数が減少して廃刊を余儀なくされた。読者の声を汲み取り、需要に合わせた情報を供給することは、雑誌が生き残るためには必須だったのである。

では、どのようにして少女を雑誌作りに巻き込んでいくのか。それには基本的に三つの方法がある。一つ目は無料の読者投稿欄、二つ目は有料の読者コーナー、三つ目がコンペティションである。無料の読者投稿欄は、無料であるがゆえに投稿数があまりにも多く、編集者から回答がもらえるかどうかは運次第だった上に、回答があったとしても何か月待たなければならぬかわからなかった。有料の読者コーナーは、自分の名前が定期的に紙面に掲載される可能性は高まるものの、作品の提出や新会員の勧誘などのノルマが課せられる上に、何よりお金がかかってしまう。コンペティションは、もちろん入賞の可能性は非常に低いものの、参加費は取られない（ただし読者から搾取する巧妙な手口はある）。その上多くの場合賞金や賞品があり、さらに勝ち残ることによって自分が優等であることを証明できる。賞金や賞品に加えて承認欲求をも満たしてくれるコンペティションが、少女向けの新しいエンターテインメントになり、注目を集めたのは想像に難くない。

コンペティションは絵画や裁縫、写真などの作品を提出する課題や、歴史や文学の知識を問う課題もあったが、特に多くのエントリーがあって盛り上がったのが、直接的にも間接的にも女性観・少女観を問うものであった。後期ヴィクトリア朝は学校教育や高等教育が徐々に拡大し、専門職への門戸も開かれた時代だった。新しい時代を経験している少女たちは、伝統的女性観を重んじつつも、理想の「新しい少女」² となるべく切磋琢磨したのである。雑誌と読者が価値観のすり合わせを行って、両者の関係性が近づいたのも、19世紀末の少女文化の特徴だと言える。

コンペティションの果たした役割を概観するのに最も適しているのは、後期ヴィクトリア朝の代表的少女雑誌 *Girl's Own Paper* (1880-1908; 以下 *GOP*)³ だろう。*GOP* は福音主義系団体 *Religious Tract Society* (以下 *RTS*) が出版していた雑誌である。基本的には良妻賢母教育を目的としつつも、保守一辺倒にならずに流行に敏感な紙面作りをして、当時の最大手の少女雑誌となった。

本稿では *GOP* におけるコンペティションの登場と発展によって、どのような共同体が構築されていたのか、そこにどのような変化が生まれたのか、また読者の参加によってどのような少女像の構築が可能になった（もしくは制限された）のかを明らかにする。

1. 「少女」という共同体の表出と肥大化による歪み

GOP はそれまでの少女雑誌とは一線を画する存在であった。19世紀後半にはペニー・ドレッドフルと呼ばれる暴力や犯罪などを題材にした安価な読み物が流行した。

RTSはこのことに危機感を覚え、質が良くて読んでいて楽しい雑誌を作ることで、ペニー・ドレッドフルの市場からの追放を試みた。そこで出版されたのがGOPの兄弟誌*Boy's Own Paper* (1879-1967; 以下BOP)である。BOPは出版と同時に大流行し、一年後には少女向けの雑誌GOPが出版されるに至った。この2誌の流行により、少年少女向けの雑誌に高い市場価値があることが認められたのである。MPのように、上層中産階級から中産階級の少女向けに、英国国教会の教義を説くための教訓的な読み物を掲載していた雑誌に比べ、GOPは挿絵や装飾もふんだんに施され、題材も豊富だった。そのため低層中産階級から中産階級をターゲットにしつつも、実際にはより広い階級の読者を獲得した。GOPは1部16ページ構成の1ペニーの週刊誌で、推定販売部数は150,000部から250,000部だった (Moruzi, "Children's Periodicals" 294)。これは月刊誌で1880年代は1部6ペンスだったMPの推定販売部数が2,000部から3,000部だったことを考えると、値段の違いを考えても爆発的な流行だったと言える (Moruzi, "Children's Periodicals" 294)。

「少女」と呼ばれる年齢層が雑誌を通して同世代の少女の存在を感じ、想像の共同体を得たのは初めてだったわけだが、コンペティションが始まったことによってその共同体の大きさが徐々に見え始めた。つまり、「少女」であることを自負する人々が、どれだけ多く広く存在するのかが可視化されたのである。

GOPの第1号、「Prize Competition」と呼ばれるコンペティション欄は、以下の告知から始まった。

The Editor offers two Prizes of Two GUINEAS and ONE GUINEA for the two best essays on the life of any one famous English woman, born in the present century. Other deserving competitors will receive a CERTIFICATE OF MERIT. The subject of the essay to be selected by the competitor, and the composition and handwriting to be certificated by a minister, parent, or teacher as the girl's unaided work. No one over the age of nineteen will be eligible for a prize. The essay should be confined in length to a page (three columns) of this Magazine and the paper be written upon only on one side. The last day for receiving essays for this competition is May-day, 1880.

There will be other competitions for prizes in Water-colour Painting, Crewel Work, and Plain Sewing. Full particulars of there, however, will be announced in Nos. 2, 3, and 4 respectively of THE GIRL'S OWN PAPER. (vol. 1; 15強調原文)

19世紀に生まれた「English」の女性の人生についてのエッセイコンペティションには、優勝には2ギニー、準優勝には1ギニーの賞金が付いている⁴。GOP読者に相応

しい職業を紹介する1880年1月の記事“On Earning One's Living”によると、製本業の給料が週に9～12シリング、造花作りが15～25シリングだった (Caulfield 75)。エッセイが入賞すれば働いている若い女性の一月か二月分の給料と同等のお金が手に入るのだから、多くの読者にとっては大金だっただろう。また、このように若い女性がお金を巡って競い合うことがエンターテインメントになっていること自体に注目する価値がある。「家庭への愛着、他者への奉仕、従順、弱々しさ」(パーヴィス 5) が中産階級的「女らしさ」と同一視されていたヴィクトリア朝社会において、他者と競い、お金を手に入れることは、一世代前であれば批難の対象になっていてもおかしくない。

GOPの第2号では水彩画、第3号では刺繍、第4号では裁縫のコンペティションが発表され、エッセイと同様に優勝者に2ギニー、準優勝者に1ギニーが贈られた。しかし第2号から第4号のコンペティションにはエッセイコンペティションと異なっている点がある。それは、“It is intended to present the best pictures to various hospitals and other institutions, where they may help to brighten plain walls and cheer sad hearts” (vol. 1; 32) という点である。コンペティションに参加することによって、社会奉仕もできるという仕組みを作ることで、少女が競い合って賞金を得ることに対する批判と罪悪感を回避しているのだろう。新しい試みを取り入れつつも、ヴィクトリア朝的価値観を決して否定しない態度に、GOPの鋭いバランス感覚が現れている。

約半年後の結果発表によると、“all parts of the world” から、エッセイは1,221件、水彩画は125件、刺繍は44件、裁縫は209件の応募があった (vol. 1; 398)。1月の創刊号から4週間かけて課題を発表し、5月までに計1,599件の応募があったのだから、十分な成功だと言えるだろう。エッセイコンペティションの優勝者Henrietta Alicia Crowtherは詩人Frances Ridley Havergalについて書いたが、題材として最も人気だったのは、Charlotte Brontëで、次いでGrace Darling, Florence Nightingaleについてのエッセイが多かった (vol. 1; 398)。もちろんエッセイが特別な材料など必要ない、最も取り組みやすい課題だが、同時にいかに当時の読者の「書きたい」という欲求が高かったかを伺わせる結果でもある。

結果発表では優勝者、準優勝者、特別賞受賞者に加え、一級、二級、三級に順位分けされた入賞者全員のフルネーム、住所、年齢が公開された。19歳以下しか応募できないため、入賞者は16歳から18歳くらいが多いが、四つのコンペティションの最年少入賞者は11歳である (しかしエッセイコンペティションでは21歳の入賞者もいる)。入賞者の住所を見ると、イングランドだけではなく、エディンバラ、ウェールズ、アイルランド等からも応募がある。裁縫のコンペティションにはワイト島在住の入賞者もいて、発売半年にしてGOPの勢力範囲がブリテン諸島全土に拡大しつつあ

ることがわかる。

GOPが発売されたきっかけは、BOPに潜在的な少女読者が数多く存在しており、少女向けの雑誌の需要が十分に高いことをRTSが知っていたことにあるわけだが、コンペティションが行われることによって、「潜在的な少女読者」が想像ではなく実際に存在する人物であることが確認され、そして1,599人を筆頭とする読者共同体の大きさがうっすらと見えてきた。

上記の結果発表と同時に、第2回目の“Prize Competition”の開催が告知されたが、二つ変更点があった。一つ目は、参加条件の年齢制限が19歳から21歳に引き上げられ、またエッセイ、刺繍、裁縫のコンペティションでは15歳以下用の特別賞（賞金は1ギニー）が新設されたことである（vol. 1; 398）。第1回目のコンペティションで21歳の入賞者がいたことからわかるように、これは編集側が想定していたより、「少女」という自覚を持ち、この雑誌を読んでいる読者の年齢層が広がったことを表している。コンペティションが開催されることによって、読者と編集者の間にあった感覚のずれが見直されるきっかけとなったはずだ。

二つ目は、図1のように、入賞者の作品が掲載されたことである。当時はまだ水彩画を文字と同時に印刷することが困難だったため、編集部による木口木版の模写が掲載された。第2回目の水彩画コンペティションのテーマは「夏」で、夏の景色ではなく、夏を象徴する人物像を描いた想像力が評価され、18歳のEva Webbが優勝した（vol. 2; 153）。第1回目、第2回目にはなかったが、第3回目には最優秀エッセイも掲載されるようになり、雑誌に認められた「優等な」読者がどのような作品を生み出し



図1 “The Best Pictures of the Competition.” (vol. 2; 152)

ていたのかが、他の読者にも明らかにされた。このように雑誌に認められる少女の条件が可視化されることによって、読者はGOPが考える理想の少女像をより意識してコンペティションに参加したことだろう。

さらに、第2回のコンペティションではGOPの読者層が物理的にも拡大していることも判明する。第2回目のエッセイコンペティションの課題は18世紀に生まれた“English”の女性についてで、連続して自国の誇るべき女性について問われた。最も多くのエッセイの題材になったのは詩人のFelicia Hemans、そして監獄の改革を行ったElizabeth Fry、慈善活動家のHannah Moreが続いた。優勝者はインド在住者で、二級に

はジャマイカ在住者も入賞している。名前から察するに両者ともイギリスからの移民かその子孫であると思われる。GOPは発売から1年余りで植民地でも着実に読者を獲得した。これは週刊誌であるGOPを定期的に運んだり、コンペティション用の提出物を締切日までに出版社があるロンドンに送ったりすることができる交通網の発達した時代だからこそその読者の広がりである。帝国の拡大とともに世界中に移住するようになった子どもたちは、このような恩恵を受けて、海外にいながらイギリス人少女としてのアイデンティティを獲得することができたのである。しかしその是非は当然、要議論だろう。

Kristine Moruziは当時の少女文化の移ろいやすさ、少女という存在の定義し難さについて次のように述べている。

If girlhood were less changeable, it would have been easier to identify girl reader and keep her interest in a particular magazine. Moreover, editors and contributors to girl's magazines were often faced with the difficulties of keeping pace with a rapidly evolving girl's culture marked by distinct generational differences. (Moruzi, *Constructing Girlhood* 10)

発売1年にして植民地からもコンペティションの応募が来るほどの広い読者層を獲得したGOPだったが、当然上記のような読者の変化、世代交代に悩まされるのである。読者を惹きつけ続けるためには、新しい試みをしなければならない。一方で、新しいものばかりを追い求めていると、読者の“a Counsellor, Playmate, Guardian, Instructor, Companion, and Friend” (Brake and Demoor 249) になるというGOPの方針がぶれてしまうため、さらなるバランス感覚が求められる。それがいかに困難なことであるかが、1887年の1月に、ヴィクトリア女王の即位50年を祝って開催された“The Queen's Jubilee Prize Competition”で明らかになってしまう。

このコンペティションの対象は13歳から23歳までと、さらに対象年齢が広がった。優勝賞品は金のブローチと豪華で、課題も次のように、より大きなテーマが設定された。

The subject of our next competition is to be the notable women of the reign of Queen Victoria.

Of these, each competitor will make out a list of herself, and regarding those whom she selects, she will be required to state, briefly and clearly, who they were, when and where they were born, and when and where they died—if they be dead—and to give such particulars about what they have done as will prove

their right to the title of notable women. (vol. 8; 273)

“notable women”を選ぶという課題を与えられることで、読者は誰を notable とするかという女性観を問われている。“the right to the title of notable women”を決めるのはもちろん編集者であるため、1880年や81年に開催されていた“Prize Competition”と同様に、編集者の気に入る「正解」を導き出さなければならない。一見“the notable women of the reign of Queen Victoria”というのは、“English woman”よりも視野が広がった課題のように思われるが、次のページで“The Notable Women Dealt With must be all be British subjects: foreigner will not count. It is not necessary that they should have been born after Queen Victoria came to the throne. All may be included who have lived any part of their lives in the reign of Her Majesty” (vol. 8; 274 強調原文) と言い換えられている。これについて、Beth Rodgersが“The implication seems to be that heroism is nationally contingent: foreign women are not notable by virtue of their foreignness” (55) と指摘しているように、この条件付けは、帝国の人間か否かというヒエラルキーが存在していることを正当化する行為である。帝国が最も華やいだ時代に、その区別なく世界を見ることを求めるほうが困難ではあるが、GOPが定義する“notable women”という称号は、どのような偉業を成し遂げていようとも帝国の人間でなければ与えることはできないという固定概念を植え付ける装置になっている。

地域による差別化は、選ばれる女性たちよりも、応募する読者に対してより露骨だった。このコンペティションは、“A Foreign and Colonial Competitors of All Ages” (274)、つまりイギリス国内のみならず、植民地や外国に住む読者にも開かれていた。このこと自体は、GOPがそれまでのコンペティションの応募状況を見て、読者が世界中にいることに気づき、彼女たちにより雑誌への貢献を求める態度だと受け取ることができる。実際、半年後の結果発表によると、このコンペティションには920件の応募があり、そのうち112通は“Foreign”と“Colonial”の読者からの応募だった (vol. 8; 692)。12歳から26歳まで年齢ごとに優勝者、1級、2級、3級入賞者の名前と在住地が掲載された。ここでもまた、元々の応募条件では対象年齢は13歳から23歳までとなっていたが、年齢によって「少女」を定義しようという試みは失敗に終わるのであった。

結果発表からは、実際に多くの国から応募があったことがわかる。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、マルタ、インド、タスマニア、ドミニカ、スウェーデン、日本など、アジアやカリブ地域からの入賞者もおり、GOPの勢力範囲が発売1～2年目と比べものにならないくらい広がっているのは明らかである。

一方で、“Special Prize for Foreign and Colonial Competitors” という特別賞が別途設けられて、本国の少女と“Foreign”と“Colonial”の少女が別基準で評価されたことの違和感は指摘しなければならない。なぜこのような特別枠が設けられたかの経緯については、以下の通りである。

We have long recognised the fact that those who lived abroad labour, as a rule, under considerable disadvantages in competing with majority of girls who stay at home, and we are glad to show, by the offer of this special prize, our appreciation of the painstaking efforts of many readers in distant places. (vol. 2; 274)

多くの本国にいる少女と競い合うのが海外にいる少女にとっては“considerable disadvantage”であることへ配慮ということになっているが、Rodgersはこの特別枠の設置について、次のように述べている。

“Foreign girls” are thus depicted as inhabiting a space both physically and intellectually removed from the “girls at home” . . . Yet their presumed inferiority is re-inscribed by this special prize and by the complete exclusion of “foreign women” as notable figures or suitable subjects of biography. (56)

この特別枠の設置は、単なる距離の問題ではない。結果として22歳のオーストラリア在住のCassie Cotesがこの特別賞を受賞したが、*GOP*の思惑通り、12歳から26歳までのそれぞれの年齢ごとの優勝者には“Foreign”と“Colonial”の読者は入っていなかったのである。*GOP*が想定していたよりも読者は年齢的にも地域的にも広がっていたにもかかわらず、*GOP*自身が「優等な」少女とは、本国に住んでいて、編集者が求める正解を出せる存在であると規定してしまっている。そのために、イギリス人少女としての自覚を持っているからこそコンペティションに応募しながらも、*GOP*的な少女の定義から零れ落ちる読者が出てきてしまっているのだ。この後もコンペティション自体は開催され続けるが、“at home”と“Foreign”と“Colonial”の少女たちを分ける評価方法は常態化した。年齢の矛盾は認めるが、地域の差別化で起こる矛盾は譲らない。そこには後期ヴィクトリア朝の「少女」という定義の曖昧さと限界が見える。

“A Foreign and Colonial Competitors of All Ages”と世界中の読者に呼びかけながらも、蓋を開けてみると、雑誌の流通を通して築いてきた共同体にヒエラルキーが生まれていることを雑誌自らが認めるという矛盾が浮かび上がった。“the first broadly successful magazine for girls” (Mitchell 27) だからこそ起こった、共同体

の維持、継続の難しさを示す一例であり、*GOP*という雑誌の性格上、設けなければならなかった制限でもある。一方で、“majority”の少女たちにとっては、入賞することは、この雑誌の理想の少女に近づけているということであり、自らの能力で賞金や入賞を勝ち取るという楽しみを見出すことができる場であったことも、また真実なのだろう。

2. 「書く」ことによる自己定義と共同体の強化

*GOP*は1880年代後半から、コンペティションにより多くのページと賞金を与え、見返りに読者により大きな貢献を求めようになった。先述のコンペティションは基本的にエッセイや作品を募集して、入賞者の名前と作品の模写が掲載されていたが、1887年の10月から始まった“*Our Prize Competitions: Essay Writing on a Great English Author*”では、ようやく定期的受賞エッセイが紙面に掲載されるようになったのだ。このコンペティションの賞金は、優勝が10ギニー、準優勝が5ギニーと非常に高額になった。*GOP*は第1回目のコンペティションから、エッセイの内容だけではなく、文法や文字の美しさへのこだわりが強かった⁶。10ギニー支払うというのは、このエッセイコンペティションの成功への期待がそれだけ大きかったということだろう。詳細な課題と要件は以下の通りである。

The subject selected for our first competition is My Favorite Heroine from Shakespeare.

Intending competitors are advised to read or re-read Mrs. Cowdon-Clarke's article on “Shakespeare as the Girl's Friend,” published in No. 388 of this magazine, and then to decide on the heroine she wishes most to write about. (vol. 9; 32 強調原文)

William Shakespeareの作品で一番好きな女性について書くという課題だが、自由に書いて良いわけではない。書きたければ、第388号まで遡って“Shakespeare as the Girl's Friend”という記事を読み、ヒントを見つけ出さなければならないのだ。“competitors are advised to read or re-read”と言われているのだから、その記事を見無視してエッセイを書いても入賞の見込みは低いのだろう。

“Shakespeare as the Girl's Friend”を読むと、*GOP*には、読者にShakespeareの作品から読み取らせたいことがあるのは明白である。

To the young girl, emerging from childhood and taking her first step into the

more active and self-dependent career of women-life, Shakespeare's vital precepts and models render him essentially a heling friend. To her he comes instructively and abidingly; in his page *she may find warning*, guidance, kindest monition, and wisest counsel. Through his feminine portraits she may see, as in a faithful glass, vivid pictures of what she has to evitate, or what she has to imitate, in order to become a worthy and admirable woman. (vol. 8; 562 強調原文)

“*she may find warning, guidance, kindest monition, and wisest counsel*” と強調してあるように、*GOP*はShakespeareの作品を通して、読者に大人になるための心構えを説いている。まさに“a Counsellor, Playmate, Guardian, Instructor, Companion, and Friend”としての*GOP*を作るという編集長Petersのモットーと一致したエッセイコンペティションである。

結果発表は1888年3月に行われた。2ページに亘る編集者の講評によると、おおよそ満足の行くエッセイが集まったようだった。しかしこの講評で目立つのは、出来が良い作品への称賛というよりも、「間違った」解釈への驚きと落胆である。

一番人気の人物は*Marchant of Venice*のPortiaで、応募の3分の1を占めた。その中には、次のようにPortiaを19世紀の女性の権利の問題に結び付けて論じたエッセイや、逆に女性が男性の領域を侵すことを批難をするエッセイもあった。

Far better will it be for me to transport her to the 19th century, and show how deeply she would have been interested in the great subject of women's rights . . . She is evidently Shakespeare's pet creation, and can we not deduct from this, that the great writer would give to women a more important position than they have hitherto occupied? (vol. 9; 381-82)

この意見に対し、編集者は“Could anything be more inapropos than this . . .?” (vol. 9; 381) と強く非難するのだった。この解釈は*GOP*的には間違っていたのかもしれないが、読者が19世紀の女性の権利の問題を持ち出し、編集者のその是非を問う場面があったという事実が非常に興味深い。編集者は認めないが、読者は編集者がコントロールできるような単純な存在ではないということだ。

そしてもう一つ注目したいのが、読者の投票先の偏りである。悲劇を迎える女性たちよりも困難を乗り越えた女性のほうが6倍も人気だったのだ (vol. 9; 381)。DesdemonaとCordeliaはそれでも多くの応募があったが、Opheliaは不人気で、Julietに至ってはたった6件しか応募がなかったようだ。編集者はPortiaが一番人気であることは予測していたらしいが、悲劇を迎える女性たちに対する厳しい言葉が多

かったことに驚いたようだった。編集者は、“The ingenious girls have been especially had on poor Juliet”, “Who could imagine Portia being so cowardly as to commit suicide?”, “How different is Portia’s love from the mad passion of Juliet!”といった読者のコメントを引用し、印象的だったことを報告している (vol. 9; 381)。

GOPの使命の一つは、多くの少女が憧れてしまっていたinvalidismを払拭し、読者を“toward appropriate behaviours and toward a feminine ideal of strength, capability, and decorum”へと導くことだった (Moruzi, *Constructing Girlhood* 86)。その教育が功を奏したのか、自ら命を断ってしまう女性よりも、困難を乗り越える女性のほうが好まれていることは評価されるべきである。なぜなら、Mitchellによると、以下のように、当時の少女の悲劇好きは目に余るものがあったのだ (Mitchell 149)。

例えば、1891年にMPが開催した創作コンペティションでは、あまりにも病床の子ども、傷心の寡婦、恋人に捨てられた人がテーマになっていることが多く、共同編集者のChristabel Coleridge⁷は“extremely melancholy. . . It is, of course, bad art to force events in a story to obtain a happy ending ; but, on the other hand, it often requires much less skill to kill every one, than to work out the problem of the plot satisfactorily”だと痛烈に批判している (New Series vol. 1; 668)。その他にも *Atalanta* (1897-98) や *Young Woman* (1892-1915) のような同時代の雑誌でも、読者があまりにも悲劇に傾倒していることへの編集者による批判があった (Mitchell 149)。もちろんGOPの読者が常にPortiaを高く評価するような精神性を維持していたわけではないが、記念すべき第1回目のイギリスの作家に関するエッセイコンペティションで、読者に「新しい少女」としての意識が形成されていることが証明されている点は注目に値する。

この次のコンペティションはまた新しい課題が考えられており、また対象年齢も13歳から30歳にさらに拡大され、GOPが手を変え品を変え読者を惹きつけようとしているのが読み取れる。その次の課題というのは“Confession”というタイトルで、15個の質問に対して答えと簡単な理由を添えて提出するというものだった (vol. 9; 382)。質問というのは、人生の目標は何か、女性の美点とは何か、男性の美点とは何か、好きな本、賛美歌、聖書の一節、時間の過ごし方、作家、画家、作曲家、歴史上の人物、小説の人物、花、勉強、楽しみは何かという、統一感がなく、読者は何を求められているのかがわかりづらい。

編集者は、このコンペティションが先述の偉大な女性についてとShakespeareの作品の登場人物についてのコンペティションに比べて、盛り上がりにかけていたことを報告している。その二つのコンペティションの前に開催されていたなら、今回の結果にも満足しただろうという編集者の意見も一理あるが (vol. 10; 331)、そこには読者

の「書きたい」という欲求を満たせるかどうかの違いがあるように思われる。というのも、同時期にはGOPと同じ年齢層をターゲットにした少女雑誌が出版され始め、それらもまたこぞってエッセイや創作のコンペティションを開催しだしたのだ。

1880年代後半までは、少女雑誌市場はGOPの独壇場だったと言っても差し支えないだろう。Chatterbox (1866-1953), Aunt Judy's Magazine (1866-85), Kind Words for Boy's and Girl's (1866-79)⁵ のような、より年齢の低い子どもをターゲットとし、読者のジェンダーを指定しないような雑誌や、Boy's of England (1866-99) や Boy's Own Magazine (1855-90) のような有力な少年誌はあったものの、10代前半から20代半ばくらいまでの少女をターゲットとする雑誌はMPを除いたらほとんどなかった。少女雑誌の市場競争が激しくなったのは、GOPの成功によって少女雑誌の価値の認知度が高まった1880年代末から90年代にかけてである。特にAtalantaとGirl's Realm (1898-1915, 以下GR) はGOPとは異なる路線で世紀末の読者を惹きつけた雑誌として、少女雑誌研究でも頻繁に取り上げられている。

Atalantaは学校小説作家として人気を博したL. T. Meadeが編集長を務め、女性の高等教育や専門職の必要性を強く主張した先進的な雑誌だった。64ページ構成の月刊誌で、1部6ペンス、10代後半から20代半ばの教養の高い少女をターゲットにしていた。GRは作家Alice Corkranが編集長を務める1部6ペンスの月刊誌で、あらゆる手段を使って売り上げを伸ばすことを目標とする、極めて商業主義的な性格をしていた。初期にはまだ10歳にも満たない子どもの読者が多かったが、後に20代半ばまでをターゲットとするような内容に方向転換していった。同年代を対象とする雑誌のいずれにおいても「書く」コンペティションが同時に発生しているのだから、この時代の少女の「書く」ことへの欲求は大いに商業的価値を持っていたのだと言える。

前述したMPが1891年に開催した創作コンペティションは、これまでに執筆活動でいかなる対価も受け取ったことがない初心者向けで、131通の応募があり、南アフリカ在住の読者が賞金5ポンドを受け取った (New Series vol. 1; 668)。GOPと比べてしまうと応募数が少ないように見えるが、MPはそもそも発行部数が少ないため、*"The First Story Competition proved most successful. We mean to vary it in this half-year by a 'Prize Essay on the Waverley Novels.' Value £2 10s."* とあるように、113通でも十分成功であったし、早くも次号で次のエッセイコンペティションが告知された (New Series vol. 2; 112)。

Atalantaは少女の執筆活動への情熱を利用し、コンペティションをよりシステム化した。前身の雑誌であるEvery Girl's Magazine (1878-87) からAtalantaに変わった第1号から、有名な作家に関する批評を掲載し、読者にその作家についてのエッセイを書かせる*"Atalanta Scholarship & Reading Union"* (以下*"ASRU"*) が設置された。*"ASRU"* にエッセイを提出するには会員になる必要があり、会員は年間2シリン

グ6ペンスを支払う Simple Subscriber と、5シリングを支払う Privileged Subscriber の二つのランクに分かれていた。Privileged Subscriber になると、エッセイの提出権を得るだけでなく、自分のエッセイを添削して返送してもらう通信教育を受けることが可能だった。毎月作家についてエッセイを執筆する Scholarship 部門と、作品や作家についての知識を問う Search Passage 部門のコンペティションが行われ、2ヶ月後には入賞者の名前が Honour List に掲載された。Honour List に掲載されると、次に応募するときに名前の後ろに H.L. (Honour List の略) と書く資格が与えられた。これを書くことができるのは、*Atalanta* 読者にとって名誉なことだっただろう。そして Honour List に載った回数が多い会員は、年度末に開催される年間王者決定戦への投稿権を得られた。

1887年から1888年の年間王者決定戦のエッセイの課題は“‘Studies serve for delight, for ornament, and for ability.’ (Bacon’s Essay, L. Of Studies.) Apply this to the books recommended for reading during the past year” というもので、神学博士で名門パブリックスクールの校長の Thomas Henry Stokoe が審査委員長を務めた (vol. 2; 124)。優勝者は23歳の Florence Mary Wilson で、30ポンドの奨学金が3年間に亘って支給されることになった。準優勝者には15ポンドが、第3位には5ポンド相当の本が贈られた。

課題を頻繁に方向転換していた GOP とは異なり、*Atalanta* のコンペティションにはより教育的な一貫した目的が看取される。*Atalanta* はその出版理念からもわかるように、教養の高い少女を読者層に取り込み、次世代のフェミニストを育成しようとしていた。このようにコンペティションに段階を設けて、年間王者決定戦まで進みたいという読者の競争心を利用することで、*Atalanta* はその理想とする少女像を読者に深く植え付けていたのである。

その成果の一人として挙げられるのが Evelyn Sharp だろう。少女雑誌に投稿している読者のその後の人生を追うのは容易ではないが、Sharp は“ASRU”で1887年から1891年まで毎年のように年間王者決定戦に駒を進め、1893年には *Atalanta* に作家として寄稿し始めた。さらにその後は児童文学作家として活躍した。彼女はサフラジェットとしても活動したようだが、その精神はまさに *Atalanta* によって培われたのである。彼女の伝記には、“*Atalanta* lasted only eleven years but this was long enough to have profound influence on Evelyn and other aspirant lady writers” (John 12) と書かれており、女性の社会的地位の向上が実現されそうな機運を感じていた少女にとって、*Atalanta* は次世代フェミニストとして学び、鍛錬し、腕試しをする場として機能していたのである。

一方 GR は、パズルや人気小説への投票など様々なコンペティションを開催し、賞品にはピアノやダイヤのネックレス、自転車などを持ち出して、読者を集めるための

ら手段は問わないというあからさまな態度を示した。しかし、とある読者からの“... my wishes are that I could write jolly, short stories, interviews, and articles—not about dress, though—and one day to be able to edit a paper” (vol. 1; 540), という手紙をきっかけに、1898年にエッセイコンペティション“Literary Page”が始まった。少女が喜ぶ題材と言えどドレスやファッションについて、と考えていたのである。編集者の予想を裏切り、読者からもっと自分の実力を試すようなものを書きたいという要望があったのだから、この時代の少女にとっていかに「書く」ことが生活の一部であり、自分の腕を試したいという欲求が高かったかを物語っている。第1回目の“Literary Page”ではMathew Arnoldがテーマとなり、“big girl”と“younger readers”に分けて課題が出された (vol. 1; 538)。GOPが何度「少女」の年齢を定義しようと試みても失敗に終わっていることを考慮すると、GRが年齢制限を明確にしないのは、読者を排除しない効果があったかもしれない。

GRは写真をふんだんに掲載しているのが特徴で、図2のように短編小説コンペティションの入賞者は、自分の写真を雑誌に掲載してもらうことができた。19世紀末にはカメラは小型化し、女性一人でも持ち歩けるようになった。技術の発展により、雑誌に認められ、賞金や賞品を与えられる選ばれし読者の顔、髪型、洋服などをも見ることができるようになった。GOPでコンペティションが始まったときには、定期的に入賞者の名前、年齢、住所が掲載されることで、少女雑誌の読者層の広がりが見らくなったが、次第に読者が書いたエッセイや短編小説が読めるようになり、20世紀を目前に顔を見れるようになった。こうして雑誌に選ばれた優等な読者は、「少女のなかの少女」として新しい少女の時代を代表する存在となっていったのだ。

同時期の少女雑誌がいずれも「書く」コンペティションを開催し、そこに賞金を付けたり、読者の書いたものや顔写真を載せるためにページを割いたりしていることから、いかにこのようなコンペティションが少女を惹きつけ、努力を促し、雑誌に貢献するよう読者に働きかける力が強かったかは明白である。雑誌に載りたい読者は、懸命に雑誌の求める答えを考え、大いに努力したことだろう。そして入賞したエッセイなどを読んだ読者は、これが「正解」であると学び、その雑誌の精神を内在化させるのである。「書く」ことで生まれた共同体は、読者の力によって強化され、雑誌の理想の少女が繰り返

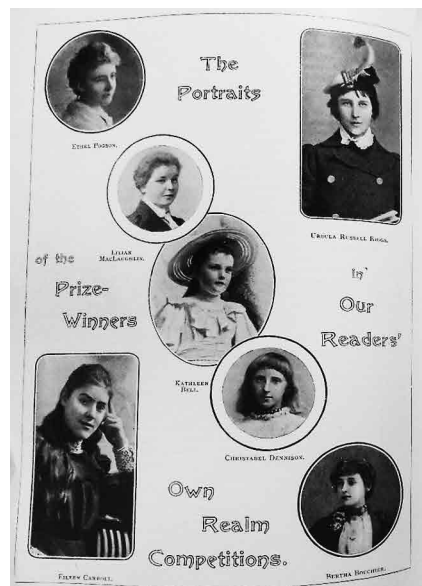


図2 “The Portraits of the Prize-Winners in Our Reader’s Own Realm Competitions” (vol. 2 892)

返し生産され続けた。雑誌と読者は相互補完的に機能していたのである。

おわりに

本稿では、後期ヴィクトリア朝の少女雑誌におけるコンペティションの導入と発展によって浮かび上がる読者と共同体の姿を明らかにしてきた。その中で見えてきたのは、雑誌を通して作られた「少女」という共同体が変化を重ねながら成長していたことと、読者の「書く」ことへの情熱が雑誌を盛り上げ、読者が自ら少女文化の作り手になっていたということである。GOPはキリスト教的な出版理念と商品としての雑誌の売り出し方のバランスを考え成功した雑誌だったものの、コンペティションの詳細を検証すると、そこにはその規模の大きさがわかり始めた共同体をコントロールしたいという雑誌の思惑が見え隠れしていた。しかしGOPの定義には当てはまらないものの、自ら「少女」であることを自負してコンペティションに参加する読者が後を絶たなかった。これはGOPの読者観の限界であるとともに、読み物を通して形成される共同体が次々と少女を巻き込んでいく引力の強さを表しているだろう。

1880年代後半からは、他の雑誌もコンペティションを開催し始めた。それぞれの雑誌が様々なコンペティションを考え出し、読者にアピールしていたが、いずれも雑誌でもエッセイや小説などを書くコンペティションを同時期に開催していたのは偶然ではない。当時の少女たちは「書く」ことへの欲求に満ちており、雑誌にその機会を求めた。しかし自由に書かせるのではなく、書かせたいものを規定することによって、読者を利用して「正しい」少女像を打ち出したのである。雑誌が理想の少女像を語るだけではなく、読者に語るることによって、他の読者の賛同と競争心を誘い、共同体を強化した。コンペティションはただの遊びではなく、読者を雑誌という少女のための空間に呼び込むための装置であり、読者にとっては楽しみながら承認欲求を満たしてくれる場であった。コンペティションの役割を検証すると、有機的に結びつく雑誌と読者の関係性を明らかにすることができるのである。

本研究はJSPS科研費19K13111（イギリス少女雑誌における「新しい少女」と「新しい読者」の形成）の助成を受けている。

《註》

1. タイトルは1866年に*Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church*に変更された。
2. 「新しい少女」とは次のSally Mitchellの定義に則っている。“The new girl—no longer a

child, not yet a (sexual) adult—occupied a provisional free space. Girl’s culture suggested new way of being, new modes of behavior, and new attitudes that were not yet acceptable for adult women (except in the case of the advanced few).” (3)「少女」という言葉の語感が現在と異なることに注意したい。ここでの「少女」は、もはや子どもではないけれども、まだ大人でもない年齢層のことを指す。

3. *Girl’s Own Paper* というタイトルは1880年から1908年10月まで使用された。1908年11月から1927年までは *Girl’s Own Paper and Woman’s Magazine*, 1928年から1930年までは *Woman’s Magazine and Girl’s Own Paper*, 1931年から1947年までは再度 *Girl’s Own Paper*, 1947年から1950年まで *Girl’s Own Paper and Heiress*, 1951年から1956年の廃刊まで *Heiress* というタイトルが使われた。1880年から1908年まで Charles Peters が編集長を務め, Peters が亡くなった後, Flora Klickman が就任した。編集長によって出版理念が異なるため, Peters が編集長の期間を一つの区切りとして考え, 本稿では1908年までの *GOP* を対象とする。なお本稿ではいずれの雑誌についても1年分が1冊にまとめて販売されていた年版から全て引用する。
4. 1ギニーは21シリング, 252ペンス。
5. その後1937年まで *Young England* として出版された。
6. 無料読者投稿欄 “Answers to Correspondents” は, 読者からの質問・相談に編集者が答える場だったが, 質問内容とは関係なく, 頻繁に文字の美しさや文法の正確さについて厳しいコメントがあった。
7. Samuel Taylor Coleridge の孫で, 1891年に *MP* の編集に加わり, *MP* に読者投稿欄を設置するなどの雑誌の改革を行った。

《引用文献》

- “Atalanta Scholarship & Reading Union.” *Atalanta*, vol. 2, no. 2, Nov. 1888. pp. 120-25.
- “The Best Pictures of the Competition.” *Girl’s Own Paper*, vol. 2, no. 49, 4 Dec. 1880. p. 152.
- Brake, Laurel and Marysa Demoor. *Dictionary of Nineteenth-century Journalism in Great Britain and Ireland*. Academia Press and The British Library, 2009.
- Caulfield, S. F. A. “On Earning One’s Living: Fruitful Fields for Honest Labour.” *Girl’s Own Paper*, vol. 1, no. 5, 31 Jan. 1880. pp. 74-76.
- “The China Cupboard.” *Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church: New Series*. vol. 1, no. 6, 1 June, 1891. pp. 668-76.
- “The China Cupboard.” *Monthly Packet of Evening Readings for Members of the English Church: New Series*. vol. 2, no. 7, 1 July, 1891. pp. 112-120.
- Corkran, Alice. “Chat with the Girl of the Period.” *Girl’s Realm*, vol. 1, no. 5, Mar. 1899. p. 540.
- . “Literary Page.” *Girl’s Realm*, vol. 1, no. 5, Mar. 1899. p. 538.
- Cowden-Clarke, Mary. “Shakespeare as the Girl’s Friend.” *Girl’s Own Paper*, vol. 8, no. 388, 4 June 1887. pp. 562-64.
- Drotner, Kirsten. *English Children and Their Magazines, 1751-1945*. Yale UP, 1988.
- Jenkins, Henry, Mizuko Ito, and danah boyd. *Participatory Culture in a Networked Era: A Conversation on Youth, Learning, Commerce, and Politics*. Polity Press, 2016.

- John, Angela V. *Evelyn Sharp: Rebel Woman, 1869-1955*. Manchester UP, 2009.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- Moruzi, Kristine. *Constructing Girlhood through the Periodical Press, 1850-1915*. Routledge, 2012.
- . "Children's Periodicals." *The Routledge Handbook to Nineteenth-Century British Periodicals and Newspapers*. Routledge, 2016, pp. 293-306.
- Moruzi Kristine and Natalie Coulter. "'Suitable for Us Girls': Subjectivity and Community in the Victorian Periodical Press." *Mediated Girlhoods: New Explorations of Girls' Media Culture, Volume 2*. Edited by Morgan Genevieve Blue and Mary Celeste Kearney. Peter Lang, 2018.
- "The New Prize Competitions." *Girl's Own Paper*, vol. 1, no. 25, 19 June 1880, p. 398.
- "Our Next Prize Competition: Confessions." *Girl's Own Paper*, vol. 9, no. 428, 10 Mar. 1888, pp. 382-83.
- "Our Prize Competitions: Essay Writing on a Great English Author." *Girl's Own Paper*, vol. 9, no. 406, 8 Oct. 1887, p. 32.
- "Our Prize Competition: Confessions." *Girl's Own Paper*, vol. 10, no. 478, 23 Feb. 1889, p. 331.
- "Our Prize Competition: Essay Writing on a Great English Author—My Favorite Heroine from Shakespeare." *Girl's Own Paper*, vol. 9, no. 428, 10 Mar. 1888, pp. 380-82.
- "The Portraits of the Prize Winners in Our Readers' Own Realm Competitions." *Girl's Realm*, vol. 2, no. 21, July. 1900, p. 892.
- "Prize Competitions." *Girl's Own Paper*, vol. 1, no. 1, 3 Jan. 1880, p. 15.
- "Prize Competitions." *Girl's Own Paper*, vol. 1, no. 2, 10 Jan. 1880, p. 32.
- "The Queen's Jubilee Prize Competition." *Girl's Own Paper*, vol. 8, no. 370, 29 Jan 1887, pp. 273-74.
- "The Queen's Jubilee Prize Competition." *Girl's Own Paper*, vol. 8, no. 396, 30 July 1887, pp. 692-94.
- "The Result of the Prize Competition." *Girl's Own Paper*, vol. 1, no. 25, 19 June 1880, p. 398.
- "The Result of the Prize Competition." *Girl's Own Paper*, vol. 2, no. 49, 4 Dec. 1880, p. 153.
- Rodgers, Beth. *Adolescent Girlhood and Literary Culture at the Fin de Siècle: Daughters of Today*. Palgrave Macmillan, 2016.
- パーヴィス, ジューン。『ヴィクトリア時代の女性と教育——社会階級とジェンダー』香川せつ子訳, ミネルヴァ書房, 1991年。